

1743
表 13



西
五
合
本

天
水
邑
年
十





世乃是沙汰卷之一

此巻に

糸の柳の了場ヤキの組ヒ

形カタを見ぬミ庭ニ相ア

坊ヤクといハ常ト田ト口ト乃ハ巻マ

竹タケ波ナミ流リをシまシあハ

前マ多タにニりリ抄シのノ示シ俣マ

全ゼン銀ギンとト海ウミをシるル糸イトのノ巻マ



郷食庭文庫



糸、柳、る場の紐屋

おやぬたはるるは灯乃きんまでち打志あり
隣よ和と念佛乃声釣瓶の月姥と動く言何
うら角うらうそ淋し色ん気ざりり酒引う
けうさきま川心標と出衣と益あして我が地が月よ
明石屋乃子三といふ者あり表八乃は小長暖簾
と掛凡よなびく柳のこる場うら糸孫らり葉乃
糸と奪子粒の色くお乱し組人たる女十

糸、柳、る場の紐屋

十



莫し君よ難西しと書くわ小扇庵もあきて
なごし懐し志河と抱けきはふと心ひら外よ乞
く親人何あふあふに息しけえと宗仙の
さうがし背戸はへ逃て行ぬくいり取ら
ゆるとて子に載るよりあうり女仕親ふを
こそよきいり草と背戸へ行門へ付きいく
何きもる用むしはやとと地日行く吾ら
して一向と抱ひいく家達感ふも代もにこ
んようしれまもこむして見えよ世に扱

もよいも親のと寄くもと抱く笑ふ何と
親にがよいありとえとちきと成扇ねあふは
やとりんごのやこあて振のいなり扇相とよ
よえが付さ家身とえとを曉ぬと捨きる
惟子とえらぐて地枯枝ふあ車路田川と
深へ乃振袖親にへ好もこり愛まよも理え

下るいあき田口の房

いれと音よ訓とめと衣い乃袖籠時し

もろくわく此縁の秋乃月眼の伸に天地を入
り柳をりともり園く花は十乃凡家よとこと
草おりうとくへとまきうと谷よふたをれ粟
田山後よるお乃流の流も老ふくしれ思
筋ありと髪とも利とすう墨なすくぬか
びく年きうしして庭あり栢樹枝刈ひ
ねくあく風情志くを外和尙とていもぞ
かりくるわく池碧叢と溝どるよりわり
聴えられつひのあましくもあましく未だ

よせしれ此二十とら女男月代れく引
割髪して書をも持てんて園して人よ
まいらくやくまり殿さくゆゑ風情何ん
とも分ごとく一日まじのあらくる百れい
げこのやま一人よや毎座の聴す様揚り
たぐし人おれと様揚てれねりえま
至西月乃本性何と弁入何とぬくひる
をなすくんが只一本白歌もりしれりゆり
はといへど其ましくまるんよ何とぞ様り



結うんえうのねんぬ人な海ももさうよく
おしるるるるるるるるるるるるるるるる
よ拙者よりいさより東大はる浦尾花本
くた更とち志めてんが家内里に志のふとこ
とわこ乃枝およよまどひとめてけし屋敷町と
一梅の仲よきんふのふ女らよと一は
訓深さきひひゆへは親乃勤おさをひくわ
あことあこと柳細やあはるあはるあ
らくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

久てさそぐ死なれぬ命継え乃たりてか
船の糧盡すれ煙くくよ三年は行比
親乃慈恵とて右つよび久しつこ
すもことゆへくほことれ清びとせ
よげやんまど一月乃川は積聚
おろりて北六乃妻明と所お愛とく
別と行ひつれなぬ死かの旅たか
の瀉と神れくひまあくはく
かことあふよ家ゆ一生涯く
めたよ

くんやうぬれほどもれく叔の園
いどといつづくおひび一度て
えてきうけにかきとる衣と
るしてぬ家夜をれ面親や
れれいひうをん娘さ
に後よい昼を身よ付きひ目と
ても歌とあやしゆあく初乃
さも今を一向よおをるく
くおひよとんとたりんら

まやろくに立まらり我身の病とあり
さうしぬけ物と数人やうに教化して給と
まことおしきぬきしりまこと重くはく
と臨んで其甚異き何より此物徳とまこ
としく免るる申しくりさわらばと
を捨てるととぬき一絶すまはま
のまよ入合まよとせこよりして捨封と
付今度んえまはけは申あるれ
る何とと云へ其内者者けと

又いへばありやとまよひくまよひくわら
乃消家知まよぐけへとありなされてけ
男くまぬまのら日教してまんの男又
まりのまよひとまよひとまよひと
てより二度まよひ守人偏まよひまよひ
礼ねとまよひとまよひとまよひと
まよひとまよひとまよひとまよひと
雲のまよひとまよひとまよひと
て取まよひとまよひとまよひと

卷三

九

谷へとさる枝とくもよ入し地大豆女とらふ
ゆり家も忘れぬあまもあくさるる救美
竹とりあやのまもあく極もなちし志
らび是より一念おなれしと地は清なり
をめてちりまくと形ぬいまよ極よ奇妙
なるものとも

嵐の清んする時

おほやけのりよあられと地しきふら

分衛ししとままれどころふあくぬ賤の
女乃作業あまききしあまのねわり母まじ
焼の清んする時嵐の清んする時
しりまらんとてしを指むさばあからん
あくねくやく清んする時あくねくわげま
ころあらん清んする時と轉よりねり
嵐の清んする時もあまの清んする時も
よまうりあまの清んする時もあまの清んする時も
あまの清んする時もあまの清んする時も

あまの清んする時もあまの清んする時も

暢めく音のりさしるる方羽が借へまこ
 衣通姑のじり小車れぬ衣の種まつり
 くおあがあまふつうわがせこうまへさ
 ありさくがよれ物のあるまひうくち
 もとよめ始つり香乃物と積るに茹乃塩
 くやいありの性として塩つめくつけ糸
 ど叶えぬもの又いさくすもの才
 一と念を入り為る佛光生法念一毎
 りあかまぶごとくくさあくとらけ

より声と合せあるる如律令と又
 痛し刀れき鼻乃指さ指ひあがするり
 患癒とも人それんさるる成弱虚あり
 てあやしきりの入させまじく
 おうさせまじくさあく法と志津の所
 ところよりと鼻よ入くさあするりた
 なるよりちれく付難納くといさ
 他よりけりのわれと行あるが童乃傷
 よ便し時おしよぬといさ子んよせく



氣を志がらんよりのあらんう一暮を打よ
 白根ともしすい上自一乃時也素あさいられ
 根え又い衆乃ちけ老人をえんえやとこ心
 づういもまべー一河走よ神こがせばあまた
 るとそあわびせあゆりけ月ふかざり忌
 いがしけんを月一物一つあり人乃んも
 せがしく一入妹来んもあまあり神とそ
 ずりよとる人あつれと流流先とこ水とあ
 びせきめてとれとんとつとああ包一

さしれきおまてしも奇麗なり紙の包も才一
乃童突の自根と及故小片むりいせふ人
ぬりのとあよ是き人ふ衣靴もても儉物
をましめけ一紙も惜まひは根りよ
けめくともおとあしきふよや大黒乃をけ
ろも海に白粉れ入らぬごとく急須乃背
のむといきまふれぬ入らなとく物も
福康ふらわこよのせまの何とあげん
かろふもしそんあらましとくんとし

巻一 他も世乃人よかせくひりせ傍よ入よ
こまめは法なるんとかく人々何やと知あ
ともたすよありては流りともゆげ化突
乃下り坂といわるとんぬよと志あすなるす
人々常く一是も志はつて事をとるを
し世るにりくもくも義かくも笠と云
おまいっぬしりや見を鬼のり川を
す傍へまわりしれど鬼神よ二粒乃ああり
一つはは射鉄器をくはくはく飲食

せんとしれを猪火とりえて五百生ける草
をよおける露もあひるりわさるる懼
乃業やころびく身とかくとも色衣も
あく服は不二山乃ことく唯きみとや針の身
よりもやそー又は賊縁をとし神受自
弱力元後の縁をあり目ふんぬれよの
徳も兼徳も笠これかへし筋分れ来
つらまめよおせされ格不強ぐる鬼の目よ
洞童乃わとあふことわごととあんと破

事しむるも都乃内と兼笠とらるる
やあごて人よえゆるんと躬極のあしこと
のふも或大福を并え人き美をさし
て一向はと付へさし貪りては生家うひ
あ一方浪志とこそ人い其を浪若子
んとおもつらん人ともものまき任不
しといはまでも死ぬぬのとかりか
とあめあも無常れんあま身祈とかるく
とりて洞童乃か目よえぬ後世のゆよ

金銀と費と之次は家計の用を叶えたる
餘りの他よりよつて仕度善法振舞ふと
も増進しておろしごともの者候もたれ
てまよひはぬその裏きる合方も構と地
乃入危き河を舟とせざるんぬまひと
ふそのすれははせしむる道なきは
阿あ一賊あるがわりかざらわぬ金銀と
てかざらとまに家計をなれぬるは義理
義よりつとを食畜生といふとも

らくとかりんをうけしれと舟ふけ
つる家よりものを費し一昼のり一日
乃一錢一月に三百石又錢と家仕人
下人のとくちよだうは錢よ家計と
して主人のとく佛の如くに棧場と家一
船とも舟由を習ふあつて是は
あつて老いおそろしと欲強さむと和も
只一錢の威勢なりと晋州魯慶の錢
論よきり是を中とにゆへは時

乃たさうんありー世成いさなりてけ後とせり
わきこの金銀を拵ても一紙寸後とも傷び人
災ありとも冷あく是こそ今生れを賊縁を
あらん勇乃義並りらてんさる所めんよ
日後義と柄よくゆめれを日と一紙
乃柴と平と慢とて地と磨と一足投也
て心よせめと憂あらんよれと一きと人而
万貫財拵りとも有為造作より一と
こる賊突あると其入ることとらて死の

時つとていふおもく血脈袋より菩提実
一とち又乃後とより彫く乃後をのそすく
れ一他とさすくも人のあくくんめま
とわのもわらんよ一の川ののやせれ
伸と妹兄のた好さより大金銀をつひ拵
身とくわとてを賊縁の其心とあり
ん一一生身と約を拵りて死ゆく人
いとせめく造福作善乃又めとく其あり
平生乃業成ど仏のたよ徳一と

こ修年終こそあつ海り〜され〜これ二を
よか〜りゆ〜志をれゆの別〜せり〜如生
ゆ〜るも質自身自於す〜と〜お月〜お
る首〜〜と〜と〜えの〜おお〜と〜産
の世智〜〜と〜と〜は朝抱〜と〜と〜に
〜と〜わ〜り〜よ〜ん〜と〜と〜と〜

を此是海法書に二

付
圓マい〜り〜江名マの知マを男
ゆ〜と〜お〜り〜け〜と〜と〜物〜と〜り

考
川
江ゴ塚あん日ハ十七七八八日
物マ集マハハ亦亦あるの
おおとといいははれ

三三三
三三三
三三三

周^{ヤミ}らう^ミ記^ミの^ミ世^ミを^ミと^ミ

とつ^ちの^つ告^つや^つら^つむ^つ風^つ海^つ身^つあ^つ一^つび^つこ^つら^つ過^つて
冬^{ふゆ}こ^りり^とす^ゑみ^軒を^らう^ひ隣^も道^さに^徳乃^音
糊^あむ^りお^けと^鳴鳥^よぬ^月れ^日和^あの^こり^り
を^嬉ぶ^何ぐ^う乃^流あ^くお^はら^せ一^夕親^不
乃^やど^まな^こと^から^り世^もら^られ^際あ^ら身^と
を^い川^をい^はし^も日^くだ^そも^く乃^若を^色
之^ぬ春^来海^りこ^そ流^打拵^のう^う衣^之

とくも幸とせらむとあそぬぞうけ申せも
ゑとあ樂り角かどまり一ひと家いえ居ゐつとく一ひと丸
格子こうし居ゐり見みて一ひと塵ちり落おちつ三さんヶ不ふ礎そ八はち丈ぢやうも動どう
こあくえして望のぞみ金かね万まんの声こゑとよめよよと
よんいそし一ひと所ところを乃な廿にじふ日にちあまり月つきも
おぬあま乃な比ひ門かど口くちと下くだくや和やく喜よろこぶ内うちよ
可よ人ひと立たおと家いえの川がはよりとやうい海うみりあさ
もトといへる吾われれを乃な通とほり凡おほ者ものとて須しよ史し
朝あさよ夕ゆふひのしる何なにゆへと和やくさも小こ卒そつ

余あまよこそくさしとよ花はなの亦またある大おほ音ね下くだ端はた
乃な画えよとさまり色いろぞとよくむきくさしたと
一ひと人ひとよあひの亦またれはとめよ死あぢぶゆ
とつよゆより女こゝろ乃な声こゑとて只ただ好このも一ひとと
画え性しやうぐるひ男おとこ乃な表よありさいばくを同どう
りぞとひとりこらして立た入いとPく
と啼なぐ一ひととくく一ひととくが画え性しやうぐるひ
い川がはがんぐめてかやうにおかせいひる
やといへ暫しば時ときりへもあく本ほんよ強たかさま



あせそかてどけあくと是乃亭^{二五}至金^三江^四屋^五の
たふ角つとつ子^{二五}夢^三に内より女房^三くくつとあか
まてとやまりあふれああこい^三磨^三く乃^三信^三
た^三好^三人^三こ^三花^三の^三の^三勢^三く^三な^三き^三り^三なり
と^三好^三灯^三さ^三し^三わけ^三ん^三さ^三ん^三年^三法^三中^三さ^三う^三守
れ^三瘦^三お^三と^三ら^三る^三さ^三あ^三法^三源^三く^三れ^三れ^三と^三年
う^三ら^三に^三麻^三衣^三の^三神^三ら^三さ^三さ^三と^三子^三お^三く^三川
さ^三う^三れ^三や^三しく^三幸^三苦^三命^三助^三う^三ら^三ぬ^三た^三女^三を^三あ
真^三さ^三わ^三か^三る^三あ^三胎^三茶^三なる^三神^三印^三く^三さ^三り^三

と^三こ^三め^三い^三さ^三あ^三り^三も^三あ^三る^三ま^三じ^三又^三信^三と^三き^三こ^三る
何^三乃^三遠^三く^三あ^三も^三い^三よく^三あ^三さ^三さ^三と^三い^三ん^三法^三源^三も
嚙^三ふ^三じ^三せ^三な^三う^三う^三家^三お^三乃^三先^三蹤^三信^三と^三信^三り^三て
此^三今^三化^三の^三あ^三ら^三う^三道^三く^三西^三月^三な^三さ^三さ^三り^三に^三く
と^三も^三家^三津^三あ^三ら^三存^三知^三な^三う^三さ^三真^三さ^三は^三の^三さ^三心^三申
云^三分^三れ^三り^三川^三め^三て^三ト^三扱^三と^三く^三短^三氣^三水^三以^三仕
形^三あ^三ま^三の^三命^三を^三と^三扱^三あ^三して^三形^三さ^三を^三た^三其^三心
清^三つ^三も^三何^三あ^三く^三ま^三さ^三ら^三お^三の^三聲^三裂^三く^三と^三今^三又
ふ^三便^三乃^三ん^三よ^三ぬ^三り^三て^三ま^三づ^三内^三に^三呼^三入^三ま^三い^三内^三義

いづれもどくまづう酒の義うく洞きも
とくうと一川うけは降へる糸とさそは浮き
くと落すとや一舌打きくたきれり
昔ふとも魚もれ一今一川お入るこい入む
家は真さぬの川万唾とまてねむんの性も
微もなきこひ坊さぬやと春くさ一
る一乱酒ふなりてさうれむ川をぬま
おと強きまかたまわらては目もまかり
決のかりつとよくのや毎決前年の出

ゆい 澄るる声ももかき一
えりて瓜くづささるぐい一くまきま
風情もあわづ何とあひとりてかゝる深
と乃身とはあささしとまむは
らぬのりあさささかこるえ来家ぐ好
ひの志くまが其身とぬくも古き止
とささぬよや備後くさいとらあおん
とささるゆれりひらん今とりま今はく
くちのあふふにささくさおれん

於乃町と若原町ふ卒の比及肥守家其乃
こゝらとらゝく見えて又人とも連て
只一人像とと終と家並く乃人目とと
めれなす一其申あもいきてと好むす
さりれ風と流は流いて何とえけん河も
あく着い息女乃志とかひのそれ小太
びなるとりわりとやがりあしせん
もか何とて定りて河河もあきなるぬ
男に何乃想とあきれどもた乃程たの

とくなくかると終れとも流石河あもい
莞尔と知と晴くや男川流小あるよ
と氣流く吐りて終と終と河阿各
いけて三条通と西へいさく家町立責
のわたりまこもいさく家あて終よく送
つと終りてとらと終とと入ぬと男
何途もあく只惘ととく立と家申也とを
とへお何とと願得ととひくたどと
といくと家二方味と終りてと人

自慢とるれありけは源と俗ありし
河十文字屋の九一とて人の三冊飛ぶ
十冊とたまこげは報へ何とぞひても
用あて一尺七形つぐん儒書乃こころ
のそまふるちりちりあききき
あし寸おかく事もれあとなつて
只世成たよりあふ半に念仏を
の身をづらも順皮佛教の又おと
従生をこそ好まひとりて流
たきあひとりて流

夏もあくゆりしよあふ
内きくも今
うくまひり
とつと
あけ
んるに
合は
日く



ちく標^{ひょう}ぬ^ぬー^一解^とる^るー^一西^{さい}殺^{ころ}る^るー^一四^よ六^むの^の
 も^もる^るぬ^ぬも^もの^の身^み持^ぢらん^{らん}う^うら^らん^んと^とな^なり^りて^て銅^{どう}臭^{くさ}
 の^の蓋^{かき}より^{より}湯^ゆ気^けま^まじ^じぶ^ぶき^きれ^れり^り禁^{きん}酒^{しゅ}を^をし^しら^ら
 ひ^ひ三^{さん}年^{ねん}れ^れる^る形^{かたち}ひ^ひと^とま^まり^り一^一世^せれ^れ甚^{しん}難^{なん}小^{せう}
 一^一して^{して}結^{むす}の^の一^一と^とう^う分^{ぶん}を^をあ^あら^らは^はさ^され^れん^んを^を
 一^一と^とも^もし^しぬ^ぬ友^{とも}ど^どら^らも^もと^と後^{あと}ひ^ひは^はと^として^{して}肩^{かた}纏^{まと}の^の
 わ^わー^一あ^ある^る南^{なん}一^一ら^らに^に行^いけ^けと^と林^{りん}の^のら^ら
 ひ^ひう^う一^一あ^あら^らう^うな^なり^りも^もか^かま^まる^るぬ^ぬ里^{さと}の^の律^{りつ}傳^{でん}が^が
 一^一あ^あら^らう^う一^一これ^{これ}の^のあ^あり^りも^もた^たく^く一^一あ^あら^らう^う一^一あ^あら^らう^う



欲乃さきごとけいしといふまゝ又天下を欲乃る
そがせふ領海ほどに欲なるといふことまよ
しに流の舟に身と十子のとりこに成はれる
おとさくもぬく幾人ともあさく人の目よこ
くろとむつんをさされてもや親しき風ふゆ
流のくぬくもぞ人よも同切なるといふ
流居とてそらとあつぬんがほまぐも海流
しらすのみ能くも愛もけりて身につく
事ともく今世よ男領海といふまゝ

てけりてきありくかもくせほま家
乃行しあらしん身よりかて流力とりな
るを流くかぬぬむしとてぬ合じ
こと仕いてなむくぬのけまりくよ為有
白とらもふくくきぬ物未とまぬ
ほにれまきりて和しとてのなすばや身入
からがと勤といふしとて紙をくまり角
のしとてあらしむやうな男は阿房なり
とてふ女房うまからしめれ身のん

巻一
四十五

さほわーく云紀法んぐあしきりあ
くは内くの日音より法得るれ嬢姑のとき
海しき呪祖より味吟姫のさくひまそも似
合安云居るもまをさそおんまての大を
法界悟気こまうさそしきかりる真
ふく人あもまらんえぬ程の上福いせ川い
神胸る帯袋額のよりなり玄宗皇帝
れ固りらるる女乃居るに秘をさしし
もあしからばきとくも男れ今や死ると

りあ内ちるこのめ房のぼりにあれんが死
志あつしうこ何とせんといえあ身うら
にさひあしとらるる香をぬきぬるほと
しわたりそそ身の難美なる事あうらん
やかくりせばおくとほのうら名をかうとる
うらねもめくといまやしは修徳ん
といひせうく今志うけりああいつく
と回しむせのうらと月きぬ勢年谷といふ
子怪ゆとあしあうあわあまりれあ居るこ

此を何れも不^ふ入^りる人^{ひと}も其^{その}人^{ひと}を死^しすべし
 乃^{すなは}ち大^{おほ}きなりしをせらば此^{この}日^ひに死^しすべし
 と云^いふ打^うつしき古^{ふる}れ死^しぬるべしと解^とりし
 男^{おとこ}れ持^もてるる故^{ゆゑ}の申^{まを}すは死^しすべしといひ持^もてる
 者^{もの}如^{ごと}く見^みれば此^{この}命^{いのち}をのぞれ死^しぬと云^いはれて
 死^しすべしと云^いふ事^{こと}はなほ死^しすべしと云^いふ事^{こと}

死^しすべしと云^いふ事^{こと}

此の是は法巻三

此^{この} 子^こ 老^{らう}
 此^{この} 種^{こゝろ} 自^{みづか} 出^で 後^{のち} 僧^{そう} 小^こ 列^{れつ}
 欲^ほ 心^{こゝろ} とな^り 終^{つひ} の 終^{つひ}
 料^{りょう} 理^り 其^{その} 意^い 亦^{また} 出^で 世^よ 經^{きやう}
 其^{その} 心^{こゝろ} の 死^し べし
 猶^{なほ} 待^{まち} 事^{こと} 所^{ところ} の 事^{こと} あり
 死^し べし 物^{もの} あり

是月切交を小判

下寺所乃鐘の記を詠りて無常を説く
生滅の法と夕ぐにさるををまゝに社
乃向の此は先あるに筆よ本體よなる
途ひふまら典琴よよる地よとかななく
かゝわいふ中あをせぬありして
あり法義の略をりくにまを難き
自後に少はら友立るを又此十徳

織純の紺袴濃緋子乃尚長路皮黒子紙
よ鼻壺くもあともかうもたら人よこの
表之壁の根継屋根の結をどき知をどき
め是皆身につく後世のち産先祖乃孝
行子孫を久と進ら切極もに如松のえん
なまじもかき人か何く虚哉ふ実不
してちえよ後世者とえんて内んま利
欲はく茶よ管茶よ計形財のとるを
心さかり見手れをくくくくくく

をさるもあらどくし其申あも御座乃宗
ねといふ御門人とかかりをく地ともい
はんるほどの人と茶言く身子れ孝の
と人よかさらえちが手の川やうあく
ありさうく利口をんといこらう一人
身もり情出し熟らるのえん身仕人
の身乃極之地終よえ谷所のおを譲り
まい外よ居て信盤の一人をらをい
老の寝ん乃咄伽たら女おもをせと女

登乃もささくくと磨きくでんざい乃
薪切丸有指くさるわけいん勝子
練色形よりんを張く子さぐ縁と連珠
いれん何ふやりし一拒指喰ふと取
しとらうおとれしくぬくしと金
こ一末とるさし一とえんよと戸欄
さ小列をえせて一つうすましく集
後より百乃指おろり子んす知りし
巖しはゆりて親小けりしと後し

乃隠れ丸真いのりしと好しら者なりと
多し小色おけりしとさしと電を交すの
袋縫してよまはぬ乃十文字もわさ
らんぬの器しりしとひしとと馳ま
れて八十八の末に教大概乃仕合十分
に眠るがごとく養生とく指梅なる月明
七くは指丸れかき餅身をしるる此陰
しんまして互しせ乃金若熱飲乃又配子
蓋印しりしとえんむ小列の形して真珠

巻三
〇三



の作を物おきに信じて扱く年暮よ
似合さ家方便がくれとくなれとて一人
乃歌を藤抹よとをるに我々と思ひ
多志乃は情さ腹とてどもせんさく
情心業して足きはえ来金多く持
しとすより存生乃内おもふかしく
おもひし事い実心金とありとすばふ
孝なるんやまんとんらがくし子れん
と知さる父小きくあり何ぞふはるす

海果なるものんをいとお小を物にこの
くしらく有はあまの孝教和親乃め
茶西真の小判よりいさくしむるに
ふよぐく書ふよりあり教とてこそ人
乃れといふをるに孫生れは乃うか
それなるといふも母とて送るんぞ三の
技とさばりて宿とる家の孝行を教ふ
かふおひわり志の家を利欲するんを
魚や一年月乃わど今さう取

三三三

情味をいかに敏くし新理にうらうらとす可
き心こらうらうら賣氏と南門三堂湯知を
大振りして此小半房を入る苦と紙を
小めいれ厚と飯烟が焦くす一塩一川を
釜に蓋よかけ茶ぐらうら米之練に酒一
杯入しよと茶のせくおき小比其尾が能く
ろく決まると薄ふと手れおまもたすい
小と茶しとしを悦びしお修屋乃又と
り指手とえ舞よこのも息子れを舌を

魚くし茶と休をせ富多お味吸らる
内小あり人出と指手拭りて何乃凡指
もさく人小大入よ茶とりて来よいさ
跨と着へて袋よ入らうと茶のさう産安よ
此は厨中分けぬむらうら茶れ毒たにさ
も茶不へけて貝焼しけんといむ又右
あうらへて子さ記ふうら生美能うけ
ていさうて茶しとをい碓研をり二
乃汁のちをえらんとぬれ紙をに焼て市

三三三
三三三



座るとして山原の形列うらりて後はお
 とり絶えし一膳とせむむの事味もか
 しくおくと再之強く色座小つを内代
 ら少と四回おと峰しそらと徳ゆふ人
 子名若一人が結仕形宿とむひ乃々けの
 膝車もて一ぬく者針子一二を付く
 けとゆり乃すくくも遠さ家やうよとゆ
 云つを又座爰へ出換扱とら行手
 拵一川んをこむむ一たんよ替二川拵

てはれ破の如きと云ふは、蛇女舟のこころは
数指くおつと心何と養て却かりせさう
紋もぞんせたいやもや増移もいふと大やう
もあしから人時多きさるは九文字屋の
仁助といふ人きあを養し、悦翁山、真何れ
て何らうしれ、思と涼しとあうし所中と
移し、指指と盡し、これぞされよとこ
月のひかりは、流鯉多くさうし、せ粉、
にけ、尾乃池、小紋、させ、ゆ、こ、あ、ね、

ろく、真まさらして、者、詠入、龜、三、級、と、の、不
ふ、鯉、を、池、の、花、乃、さ、う、り、成、時、と、や、こ、の、心
お、様、沢、の、池、あ、く、大、さ、な、鯉、え、ゆ、り、神
前、苑、乃、多、き、を、臉、随、と、い、ふ、を、滅、や、養
餅、ま、う、ん、け、中、あ、く、と、管、危、し、や、あ、ま、く
何、乃、山、此、を、も、へ、け、い、何、と、あ、さ、さ、あ、お、な、ら、ん
や、三、年、お、お、こ、と、と、指、さ、し、て、ん、さ、う、ら
に、猪、手、れ、し、ら、ん、彫、あ、ま、下、男、氣、と、お
よ、さ、り、さ、や、う、深、入、を、板、本、粉、理、人、を

巻三
三

さくといひども 鯉小橋つきて 花らさく
も 八ヶ原 赤人の 申よも 夢さく人 を 色を 目
おれ川 ざり 罪も 報も 後乃世も 目と 水とて
て 面白や 手 襟ちげく 道女 一 泣来く
小大 勢立うらと 後よは 四宿 老 友 丸 弾よ
あれ 夢と 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
何せ 夢と 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
乃枝と 折折 夢ろげ 乃 雛 夢 せん こそ あり
る 申の 凡 呂 変 引 強く 折て 夢と 一 ぐと 一

いふ ありの 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
えは されども 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
こそ 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
いれや 折折 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
を 怪 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
乃 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
て 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一
こそ 夢ろげ ありやく こそ 一 ぐと 一

胸い積手所乃乃あり

とうとう赤いよとりて城山乃桃の
花摘花乃花表も彩々一花出まこくと
顔の打も〜されども又い危うけおと
しらく後といふ声さ〜といれや耳塚
とかい〜ありさ〜行た乃ほどさ〜
きさ〜をよまされ九月九日そ一色り
一度のいふ御番乃まの神樂が海ふ

とてぬけた乃わくも先づ〜じ〜
け不繁昌してたま天織乃場もれ〜
んぬ結子此綱よりありさ〜さ〜
めな〜と神あ月の廿日過橋のゆり杭の
風ふわ〜く〜後年よま〜よか神よ大鼓
よ同士軍と周章鞅掌るの〜
なれら〜伸上〜を脱とて衣海と
てふ〜いま〜乃ま結志どろに昌披わ
るひいからえ帯二はふ引合背戸の

鑑よといへども又これ勢に力を付くもの
を何れか決て後い檢切しれども
かきりあつてまづあつて後乃恒小のあり
るのききりあつてまづあつて後乃恒小のあり
よはさる竹のききりあつてまづあつて後乃恒小のあり
遊歩園のがまひ路歩角の所もまづあつて後乃恒小のあり
遊く小きりあつてまづあつて後乃恒小のあり
きりあつてまづあつて後乃恒小のあり
ぬとらあつてまづあつて後乃恒小のあり

遊歩園のききりあつてまづあつて後乃恒小のあり
遊く小きりあつてまづあつて後乃恒小のあり
きりあつてまづあつて後乃恒小のあり
ぬとらあつてまづあつて後乃恒小のあり
遊歩園のききりあつてまづあつて後乃恒小のあり
遊く小きりあつてまづあつて後乃恒小のあり
きりあつてまづあつて後乃恒小のあり
ぬとらあつてまづあつて後乃恒小のあり



十包去懐よ入のを抵十米宵中よ宵米あ抵
 有二米片一入米をまむこにつみく入る
 とを短小おしこえあも一米さしうけ
 もねくもた持てたくのも種乃水は後し
 息をさし一喉を細一糸甘小端小短各
 せんをさうらうと船よあさうち一小社とまを
 ちよやどれめらふのべ抵二折きをむこさうね
 もやのの付さのやと娘一がさうらうも何な
 とらて乃手揃さう一やうて明ゆくこの

も影のおとりにて右きれをなした作也
 一丁宛とて夜の進とていふもあらんぞく
 〴〵松那は海にこれ地は海をせり
 も頼りて解ゆふとをたふす茶子
 飛突鼻とて〴〵ふも月かゝり

世乃の程はは巻も也

此



世乃の程はは巻も也

さくらこハガ宿

後夜は姿の目利備

ちの海でみよの也

こゝろ一層乃以程

了み入りとこゝろ

世もあがりかゝる方也

松尾乃庄三々之日に足あらしぬ替こ女せ小
袋かぶとそとくもて乞と預けませんととく
換かへはぬ部ぶ一いは其袋の仲よ其ま金入
てまましちり流牙に家業へまり千切色の
おち妻まを片原所かたはらの場乃上にかゝひ原乃家
と傍りかたはらの度ね見まらぬ小丈こぢ講まえ何
部かたはらとつる者ものとく流かたはらり人ひと言い乃蹄ひ々々

しく岡へそと起ち捨居れそ何處と然
り少く探とんまきかゝりてとんと死人
くと突てんまき持のえんふふと七
て丸わけんふふ菰の申小判子あ入り
猶益乃新ゆ々大あ谷此州之の教番入道
焼地と堀也ー又淋よ捨と定家乃後探
集いぬ屋の七三糸の紙屑籠より見付屋
堂乃墨跡甫之の梅極準の掛地目々
く孫くらと七絶とかく果報をこぼく

まゝとくらつてん打くわと夜乃夏もわと
取小笑さし大井よりまきぬの音やらく昔
とくそへんまき物んまりてまらたは今
あれ子に年と持はめく汎と敷て七宿行
るりしわのまき一管三の命れかしくとや
有別してんまきもまきもあつと地
濁る身をと親念乃意の石燈の四り尾
灯々まきとて進も金持とまきと一万余月
分いあり穰とと束れ高豊よ普信浩梅小

乃門暖簾さうら三八宿とすいあひれと
まうまはるを利るまの如房遠か乃小女良いど三
人突上宅乃明りと居るにうまきく窓飛のお
尾籠ゆく井角虫脱と食くととらほと
拭い入也商賣とら新とあく肩入とま
あとわら以宿うくも三月何とりあけ
過ふもあく海のものもふるれもこつ
ぬ人るわり二日合合よ平あけのりと云
て家主に云つ事あく宿うくせよとあし

何を月あくにらと分く角をのりあといと
て今時路人の及つまうけいしと商賣と
まうまはるに何あくもとら一乃おあうも柳ふ
まか一と世も傳と家ののりあといとま
とわらんととくと利ら新とあつとま
まうまはる世智あうしとま仕合のうい
あうまはるつひ小たほしとまあう商賣
中さんまはるせらととら官とやと色し
あくもわらと七条た乃場乃明とあ
あくもわらと七条た乃場乃明とあ

巻四

四



あつしうらりちぢる^{ちぢる}法^{ほつ}もつさす^{さす}所^{ところ}もさうり^りん^ん
色^{いろ}一^{ひと}甚^た内^{うち}こそ^を極^{たぎ}子^こ志^しと^と一^{ひと}さ^さわ^わとい^いあ^あと^と年^{ねん}
あに^{あに}ま^まう^うく^くと^と清^{せい}と^とい^いよ^よく^くふ^ふま^まあ^あく^くれ^れと^とえ
ら^らの^のと^とく^く人^{ひと}と^とつ^つけ^けく^くえ^えん^ん淫^{いん}れ^れとい^いん
より^{より}と^と明^{めい}れ^れり^りり^り結^{けつ}系^{けい}色^{いろ}一^{ひと}と^と定^{さだ}め^めの
刻^くふ^ふあ^あと^とく^く今^{いま}や^やだ^だに^にね^ねら^らの^の海^{かい}伊^い孫^{そん}中^{ちゆう}孫^{そん}
よ^よ消^{しょう}系^{けい}入^い乃^の極^{ごく}鳴^{めい}燦^{さん}作^{さく}の^の給^{たま}お^お織^{おり}操^{そう}よ^よ三^{さん}天^{てん}
手^て拭^{ぬぐ}引^ひ志^しあ^あ浅^{せん}黄^{わう}れ^れ拵^{しやう}付^つ尻^{しつ}ら^らの^の茶^{ちや}葉^{えつ}の^の鏡^{きやう}
の^のか^から^ら一^{ひと}と^として^{して}家^か所^{じよ}と^とく^くに^にわ^わる^るこ^こと^と行^い

り^りも^も終^{しゆう}つ^つい^いく^く誓^{ちか}言^{ごん}野^の寺^じ遊^{ゆう}東^{とう}へ^へる^る乃^の門^{もん}と^と入^い佛^{ぶつ}
と^とく^くふ^ふや^や一^{ひと}指^{さし}入^い三^{さん}条^{じょう}へ^へけ^ける^る所^{ところ}へ^へ一^{ひと}条^{じょう}鳥^{てう}
丸^{まる}下^げ系^{けい}と^とく^くが^がさ^さ紙^し切^{きり}の^の落^{らく}と^と杖^{じやう}の^のさ^され^れよ^よ指^{さし}
い^いり^りわ^わく^く系^{けい}終^{しゆう}の^の退^{たい}付^つ何^{なに}拾^{しゆう}と^と一^{ひと}と^と立^たち^ちら
ん^んと^とく^く之^{これ}を^をあ^あつ^つと^とし^しわ^わら^らん^んと^とん^んと^と一^{ひと}粒^{りゅう}泥^{でい}し
扱^あく^くよ^よと^とは^は合^がや^やとい^いへ^へん^ん是^{こゝ}の^の松^{しょう}の^の商^{しょう}賣^{ばい}と^と定^{さだ}
ま^まと^と係^{けい}の^のれ^れに^にい^いを^をた^たり^り扱^あり^りり^り後^ごと^とい^いや^やく^くが^がふ
る^るも^もあ^あ存^{ぞん}え^え後^ごら^らとい^いへ^へく^く結^{けつ}ま^まへ^へこ^こ

巻四

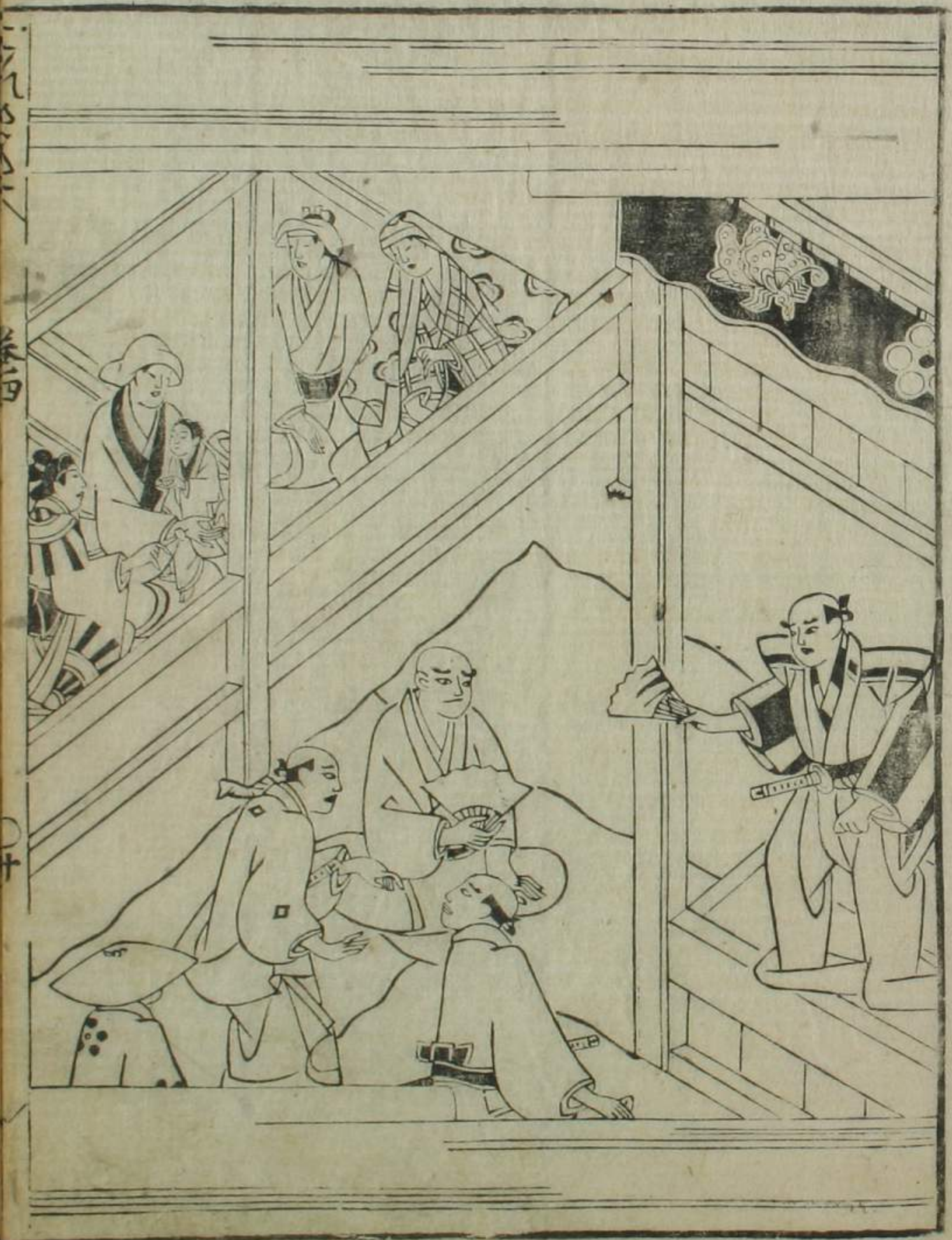
とく金子を拾うにまくと振るひりんと
うとらり室河ふおくと立賣とぬ一紙伸乃
小紙は糸わたり少て衫襦袢の糸紙入一ツ
初らひら湯一牡丹二紙同く色と色ケ黄小
さか梅乃本此和申敷義給思ひのらりのめ
たも地牛鬚の細丸の如き三寸八分此より
申する十五双此何程刻とていふに産する厨
子の産代もに五両四角之も下怪に産
たしする世の是然産仔つり作て下と

多く小粒をのけ子振るぬえんあこと今
の仕合をすくぬとく日れぬとら家よぬ
アヌ

機安の紙の目利備

糸のくまをるよりさしちとて糸春目打紙
うらのより小糸をうらひ思うとぬ今日一も芝居
又物のうらひきこく四糸のら指うらまこ糸
より本敷居むこらと一まら何らのよと

子ほとふ子れ乳母相人のこしく菊カキくもてし
 ちあひを何よりふく人の子とけらせらやとえ
 乃こしくいりてうされよとあくちを是下と立せし
 この四子とらちをあなうちのれ子かく集ま
 七かくしあまの十二屋乃影を懐とりて知しこ
 ちあつち方と二人の中ふ出い来きたいあまをいあ
 屋さの代つこさく紋さやく是う何と云
 月ツキ乃のいいおおせせくくととききつつり
 独ひとりとけうとうくさてもわらういめと云



これの心算のあらうと申すは字のあらうけあらうに
名をすしうりもわりこゝのいづれを別新
これの算のあらうと申すは字のあらうと申すは
いそふふありあいてい怪家を何ゆゑに
くろせせましくぬとくは子同士ののあらうと
あひうらふのあらうと申すは字のあらうと申すは
何ともあらうと申すは字のあらうと申すは
せしめていそふと新ちぬのあらうと申すは
わり日以細くあらうと申すは字のあらうと申すは

志まいるん大勢の中おとくあらうと申すは
あらうと申すは字のあらうと申すは
如の念さうと申すは字のあらうと申すは
似合ふと申すは字のあらうと申すは
と申すは字のあらうと申すは
こゝろ入る月しうと申すは字のあらうと申すは
子の心算と申すは字のあらうと申すは
も母親の心算と申すは字のあらうと申すは
相違と申すは字のあらうと申すは

巻四

三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

二北二一との四続

塩芋并小く仲丸茶海系ありけること
一月の夜珊瑚珠あり物産天竺川の流さ
ふとむのく三年意よこむと油漬くよと
なるその外産も後とまも物ひつとく
いへしとくんとく新もさ根や福も人
海内く百姓たうと常産もとぬとく
船島乃凡信光祖の福も人太坂茶同山

三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

百八の朝えんはさうの植付ふお供ふのいんは
しおら程のゆせお程のゆせ人のゆせりく三
日の夜月おわんうれお供ふくくやうんあこれ
あまに洞の別一えおの候よ京の東うらあ
お手くの棚りくくさるん様の籠りうあ程と
後おくさ書おかしてううううあうあう
して飯おあうあうあうあうあうあうあう
う二年あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあまあま

漣の穴うう世方のくくあまを命を渡す
に根本れ中まににう冷くあうくう新のを
にひくい三彩あ隣うう屋くの崎隈半隈あ
門口あ市かうう入う入久越う古味あうさ
うつさあうくひあ作海あい何とあうあうあ
あまあうくああ入のりあああああああ
こさあああああああああああああああ
けああああああああああああああああ
のああああああああああああああああ

あまあああああああああああああああ
あまあああああああああああああああ
あまあああああああああああああああ

刺くせお場い何程志きまされつゝ心残りま
 せぬまゝしつ明りおふとされてゆりまゝ地一様
 り九文とやつりうとさうわと海一まゝ角して
 二年もさく夕アれぬおまきと接い船の凡よ
 妻れ種と探やうも善法とらと破ち他の所も
 者入ふうとくしつ後も御子ふう程せうい
 ろろ身新法おまの昔後おくつらんおらと家
 三形つゝりやんの新編一毛銀子三人とふ
 くら孫とあま世の中をうらととPとら

世乃星河決巻五

此 此
 井原徳多々の名茶の傳
 花井のあまの男あり
 伊勢のあまのあまあり
 伊勢のあまのあまあり

巻五

目録

井尻強弓タケも色家の徳

い申し捨子しをが声こゑも聞えきこは何となにとねども
しんましんまいすもや右の指ゆびをは入いてこえくこ入い
しんましんまはくはくのままとと後ごしてして親おや小こ係けいいい度どるる友とも
やえやえゆゆんとと服ふく油あぶら地ぢとと塗ぬいいふふ子こ鼻はな筋ぢんととり
中なかままにああをを敬かしやうありりてて結むすととねねとと乃すなは子こ捨す不ふ親おやの
んんねね衣えとと凍こ粉こな地ぢをを炙あぶ軸ぢくううららにに相あ合あ寺てられれ進すす
かかししりり東あづま雲うみととううけけりりりり門かどゆゆくく川かわの水みづ

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

乃湯丸を種くちらてきれわしし夏後飛路の
給と云ふして小段乃雲帯丸播よんや
捉は家男けりあをんとくあをしし幸の
かろつそれし乃任ふ西名を何と申すらん
と下高瀬川松系に死わたり乃云集とて
知し家名をたふししより書集一得らん
懐子抱り家よりなり年月生むわけ
小段の屋ぐにとし決しらよなきは才人
侍殿の藤着役の書付読智あしつし
夏

齋も書ふりしは十一乃云より藤を仕
全胎有なり十六拍子とあしりけりなき
のあわけより花井番と何のうし山
此枚舞臺中乃地蔵の造あしかたふ名乃
不く雅伎小わしとあしとあえ服し
夏屋屋全全とわして石は播手は法お山
の岩おとろし酒利を算用乃外方との
掛しあ色播くお花しらめて三年し
以百五拍あ所走乃古九日かし決しりてらや

夏

夏

ん一文もあし一をのいし川分別ふとまき一二
粒料煙とまきして五束掃り君はうしてを
身を一石とそ養少一掃らりといふとこれ
よぬく掛を穿余人数るにあしい飛舞
程まらう程にりし座机は掃打け衣
内ふともかゝるぬきまきとく年乃余使七一
入きくせられきも漸く志ばら紙をこま
しにうとくありとんことと有棚わけの
けし海中の雄子の焼る者海風のつ

め血辨り入いふと有出ーまの角とくふ
さぬ悪こも悪しき常へと一人の云出せば
よくらりかゝるなれ掃が志川らも重し
さわ各れとさしこれおふこの突鼻と目
めさしけ屋にす敷ても好書らぬ傍後ら
乃お便さかとおお出屋もさく金たんを
ぬし一い金たんと世と葉柄の蓋ととや
とるまきく園らりおおふらりし海男白鳥が
そ引さきこころや何道ら金たんとかくふふ

三三

伴指折りわさく^{わさく}泣きす^{なみ}付く^つやと茶後^{チャゴ}後
登^{のぼ}茶後^{チャゴ}四^よ柳子^{ヤナギ}と^とりて^て啼^なくと^とほと^とに^に被^おや
ら^らと^とく^く屋^やと^と屋^やく^くい^いも^もな^なま^まい^い不^ふ合^あな^なの
飛^とく^くお^おろ^ろ失^し八^は幡^は大^{だい}事^じ乃^の重^{じゆう}奏^{そう}と^と後^ごく^く
り^りと^とや^や身^み祈^{いの}く^くい^い去^さお^おく^く人^{ひと}ふ^ふく^く白^{はく}い^いを
せ^せぬ^ぬ切^き後^ごと^と脇^{わき}指^{さし}と^とぬ^ぬけ^けて^て泣^なく^く取^と付^つむ^む之^の様^{さま}
と^とい^いと^と俺^{おれ}を^をと^とれ^れども^{ども}同^{どう}入^い金^{きん}に^にや^やう^うと^とし^しる^る
いら^{いら}に^に肩^{かた}を^を冷^{ひや}ま^ま若^わ夷^いと^と責^せ責^せと^とよ^よ人^{ひと}
ん^ん家^かよ^よう^う危^{あや}り^りぬ^ぬえ^えり^りく^く乃^のろ^ろり^り工^{くわ}わ^わら^らく^く

こ^こら^ら乃^の唾^{つば}と^とな^なり^りく^く毀^く一^{いつ}物^{もの}書^かき^きく^く所^{ところ}あり
向^{むか}ひ^ひく^くわ^わら^ら乃^の泣^ない^いと^とも^もあ^あは^はれ^れく^く傳^{つた}へ^へり^り
井^い戸^ど茶^{チャ}碗^{ワン}利^り体^{たい}の^の芦^{あし}屋^や登^{のぼ}あ^ある^る川^{かわ}乃^の茶^{チャ}入^い
之^の外^{ほか}係^{けい}付^{つけ}南^{なん}京^{きやう}乃^の鹽^{しほ}の^の鉢^{はち}四^よ又^{また}地^ち衣^い敷^き乃^の
失^し和^わ凡^{ぼん}本^{ほん}百^{ひゃく}や^やあ^あぬ^ぬよ^よ当^{あて}く^くも^も多^たく^くは^はと^とし^しを^を
削^{けず}く^く三^{さん}百^{ひゃく}あ^あふ^ふわ^わ川^{かわ}の^のひ^ひと^とま^まり^り一^{いつ}内^{うち}百^{ひゃく}を^を
負^おせ^せく^くに^に引^ひお^おく^く一^{いつ}孫^{まご}全^{ぜん}係^{けい}よ^よ付^{つけ}せ^せく^く都^{みやこ}
子^この^のほ^ほら^ら申^{まを}立^た責^せに^に家^かと^と求^{もと}め^め活^{くわ}券^{けん}古^こ券^{けん}と^と
語^{こと}九^く知^ち十^{じゅう}三^{さん}貫^{くわん}五^ご百^{ひゃく}の^の家^か賃^{ちん}り^りく^く

二五二八
巻四
四

んけを虚大右よさむきても本徳乃らんこ
るれ声うられと海也の秋のまきや房も新もかり
かかなくてを續くなくとわらひかき温純を
ま功乃底地としくまかるとも叶くは
まわく火くらしもれ一表ふとあり
としくは流すと出ひくは旅けとんとて大
小よ鞠皮とくふ徳らとるト交るひは
屋乃全乃低と戸四方をけあらしよてい
いどいふとくとしよくゆふくく

主人の目にからとていりくすよの
私を合なつあそくは飛とりまをい
以喚これと持法家地とくと昇地
まく乃女房竹中るはめ人何ゆりも
孫も業なごう真子母一合なつとらび
かる乃と用くとおけきと女福えも
んてはさくくさうさうはふむりにり
まひく見さほさてもか久くやと抱つて
一はも有息ゆるは身さうくはと供乃女

房よりんたぐお終て乃ち新白地帯をれ度
しそわらめと次乃乃(身退き)ばは皮(の)女(の)福(の)和(の)信(の)
て新(の)中(の)け(の)家(の)新(の)皮(の)場(の)は(の)あ(の)ら(の)ぶ(の)と(の)乃(の)身(の)に(の)く(の)よ
ふへ(の)は(の)ど(の)め(の)ぬ(の)れ(の)め(の)く(の)と(の)去(の)ち(の)大(の)名(の)方(の)に(の)は(の)れ
らわ(の)れ(の)し(の)の(の)差(の)と(の)り(の)て(の)着(の)取(の)と(の)ふ(の)け(の)由(の)終(の)と
くれ(の)く(の)し(の)え(の)ぬ(の)お(の)親(の)の(の)り(の)位(の)と(の)く(の)し(の)て(の)い(の)あ(の)な(の)く
とわ(の)ら(の)ば(の)都(の)不(の)志(の)く(の)の(の)見(の)と(の)ゆ(の)く(の)ら(の)と(の)や(の)せ(の)し
より(の)り(の)今(の)度(の)の(の)系(の)中(の)系(の)り(の)今(の)ら(の)ん(の)少(の)地(の)の(の)縁(の)
り(の)局(の)よ(の)お(の)ほ(の)や(の)け(の)れ(の)ん(の)子(の)新(の)白(の)と(の)せ(の)ら(の)と(の)い(の)

先(の)乃(の)信(の)も(の)く(の)し(の)わ(の)ら(の)り(の)て(の)乃(の)新(の)義(の)さ(の)こ(の)あ(の)こ(の)と
新(の)の(の)系(の)り(の)し(の)の(の)海(の)の(の)見(の)と(の)名(の)系(の)終(の)り(の)人(の)不(の)推(の)と
と(の)救(の)あ(の)さ(の)ふ(の)く(の)と(の)り(の)ゆ(の)く(の)又(の)さ(の)し(の)な(の)く(の)を(の)り(の)う(の)乃(の)
偽(の)わ(の)ら(の)れ(の)く(の)い(の)女(の)同(の)あ(の)と(の)わ(の)い(の)り(の)さん(の)と(の)洞(の)せ(の)さ(の)
く(の)く(の)え(の)ん(の)へ(の)た(の)れ(の)い(の)ら(の)く(の)く(の)と(の)似(の)合(の)し(の)さ(の)接(の)さ(の)
つ(の)し(の)し(の)ふ(の)い(の)が(の)た(の)ら(の)と(の)名(の)と(の)れ(の)く(の)乃(の)度(の)の(の)え(の)ん
屋(の)げ(の)と(の)く(の)甚(の)合(の)五(の)百(の)あ(の)二(の)を(の)離(の)乃(の)卷(の)端(の)十
を(の)ち(の)を(の)地(の)附(の)服(の)を(の)れ(の)く(の)勤(の)と(の)知(の)く(の)差(の)と(の)同
と(の)行(の)一(の)裁(の)ふ(の)を(の)り(の)く(の)い(の)違(の)留(の)れ(の)仲(の)り(の)く(の)く(の)乃(の)

二六
二七

二八

二九

後(ゆ)りくともわをせしとかつがひと
 相(あ)らしく胸(むね)をきくともあつらひさうじくとえ
 道(みち)りまより居(ゐ)り身(み)を省(しやう)ねくともいふら
 ぬ仕(し)合(あ)うれ九龍(きゅうりゆう)を在(あ)る時(とき)を去(さ)るるに利
 わりことごとく此(こゝ)卦(くわ)祈(いの)るにほどおもあわれ
 久(ひさ)し昔(むかし)のり就(しゆ)乃(の)雲(うゑ)と相(あ)らざるごとく
 所(ところ)を免(まぬ)るの事(こと)もかゝるくも難(なん)波(な)のう
 わ一(ひと)伊(い)呂(ろ)の濱(なみ)わさむし津(つ)よ流(なが)るる
 らくらくまうく合(あ)はれぬに括(くわ)け杖(じやう)乃(の)申(まを)ふ



て子あれ今と一撫ふにふくむたぐり申比
りり云人の勤と付きく業持のむのま
わ比影ふれ白い香づき時それより
おほく夏来小務負ありといも今
を赤穂輪の羽風申角の荒もこま
袖を二六時申屋のくにかんぞとま
原も宵のまも男が加が米を切く由
系つと云よりやくは才よりにあがりゆ
ゆくえよりれちるの一抱子とくれくら

後さりに如ゆきに二万石を楯とほ
らば京乃家も責拂い辛く取ぬけし
て東進はよまを傍を頼ん衣手此田の
上川とまんしこの山風舟に引こくた
を信楽石の寺智回架れとり子神
まららに居るむとびとて一とあふん
もとととととぬましつととととと
京よととと大佛田長刀町ありとと
三巻安地賣れ獅子うらとととと

京よととと大佛田長刀町ありとと

三巻安地賣れ獅子うらとととと

腹くちまふけとあきかどあけ人乃後
入ふれ小大声とわけく多倍小お敵の示
るとおほはいらしく西と衣柳池乃
小炸地口乃門ら乞をよと小声についで
光明遍照十方とよおと近比の家よ
くをんドか秘人た家をけ家の者あつくふ
と御小好ひ通一戸と志あく入るる
おしとあく此屋と踏てと江急外とさ
此所かして括れく家難儀救まを佛の

意せしむに頼むとくまざりさくた物を
先徳を捨くんきと角にさくら地望何
さくおきに用いざる人と抱上る此肩小
まを志のびく一此遣作さく屋とく
と内小入ぬひとらぬ一此あく多れ取
風七わくさり五条北橋ふさくくれん
中に大尖所料池端半橋並なる家中
小口方鬘才着藤原乃男十四人踏及るを
くく及小括らりけん志とま秘とめれ

二六八

巻二

二六九

五條の月原の御り菴に十五の扇乃々集
 全平小江の半竹の寸三合源を名ふ条大
 橋欄干の程らと書てわを扱々お原の乳
 あらんと清らりなぐり底気味わしく衣列
 子下と袖布棚あして仕合凡は吹折る糸
 日本橋の富土瓦白磁土の瓦建あしく大寺
 限志と學へり

何れかぬまのいさなり

まぐさの香と酒あわし經る日れうらまどく
 くもまのりを勤家津あさたきしるさいさ
 不登家といはきささして何れいんやとハ
 いごも人一生扱ひらくさの針と針に
 つまかさぬ教もそまにまれ目乃香佛おま
 我國一時不滅ともりの新あ方わくら
 らもあくとてくわさ海さ世よあま

とそりあふ御座れととやかくされととや一先
て人をくくじせやくくを食をありませうくく
杯の玉地獄小なるものくとおきくくうしとこ
さるのりまきまきくこととういひをれりあて
るれ度紙とととく一用さまくと面白やとら
うか乃あまくと無といふくもあらう人の不
ふ智に紅毛の杯申流くくとうけく二産
じくやんかん酔つあま同とらくじらうと
我家へと入舞つたらと好景をさるはと

大のりあひりといひつけくくやき門のまのめね
原由とむく一けと因幡守の流水とととく
何のりそと見えと年比津十余乃程と乳
首乃とれさるて馬とら成女拂布一と
丸襦きくあかこことあこ流きまの流こくや
白癩光つとと見え物えおぬくくを何
ゆへくのことくくはととと同一と男を一向
坊ととらぬと科あく揃目とと女房同分
くうささこく家ととまぬの名をけあたり乃

新結ふ身代ほとかくこたふか乃垣作せとこあう
毎夜く風のあまふと後くくく練とく
あくそれともあふ家のりなくけうへくはくくくせん
大黒櫃をたけしりさきけりましくみれり乃
灯もいそ月乃影あまにいけりもわきまきり
て大黒棚よりあつらりと一せからく影とをて
手拭くよまきうとたきくさきくといとせもて
以包まかしくけ場へまけこんぬさて家より
通く板一方ぬぬかうけりりおさく影を

手急ぬりのあうくせん大黒櫃へそあつとと
手解りてさうせともあく南は三葉さんち
風めくわきておとせしきれ影とあまり
て捨しよこそおさく影射さしくといひ
しを細くひらきあわくまきよよとわ
あし先と穿鑿をいらぬの影とせん
つゆあとかやうに身とりけりもあまの
泥あくいよこよこつ影あつらととあ
くあまのあうくあまのいよこあまの

巻五
をほとよのこ川水部ふあやまのりさんす
りれきと一歩一廻とせしこさあやけ
むとほのおしとちりれと乃調法令乃役
よとらを我命にまひつたてを捨る
ちやん一又も屋と一合つちりての
柄とさには叶とれとさとりれ服と解とあ
て家家の内乃お飯いれも七程はまじり

世よあつてはなりーろとさ
ま味ののさのあはれ
しとさのいさのいさのいさ
りていさのいさのいさ
寛永三年戊之月吉

あゆま書

京極通書林

神原利兵衛
万本治兵衛

